

2章 環境の現状と課題

栗原市は、平成17年4月1日に築館町、若柳町、栗駒町、高清水町、一迫町、瀬峰町、鶯沢町、金成町、志波姫町、花山村の10町村（旧栗原郡）が合併し誕生しました。面積は約805平方キロメートルと宮城県内最大を誇り、自然と四季のうつろいが大変美しい地域です。

1. 自然環境

(1) 地形・地質

栗原市は宮城県の北西部に位置し、全体の標高は20m～1,628mで、迫川、江合川の流域に沖積層の低地が展開し、そこから市北西部に向かって、丘陵地、山地へと続きます。山地帯以高は栗駒国定公園となっており、自然が良く残っています。

河川流域には、泥や砂、礫などが堆積しており、山地から丘陵地にかけては火山性岩石や砂岩などで被覆されています。また、栗駒山山頂付近は新期安山岩質岩石で覆われています。

(2) 河川・湖沼

栗原市には迫川をはじめとする多くの一級河川、およびそれらの支流が栗駒山やその周辺の丘陵地から仙台平野に向かって東西に流れており、平野部では伊豆沼や内沼などの池沼が残されています。また、迫川、二迫川、三迫川、長崎川にそれぞれダムが設置されています。

ため池は、金成地区や築館地区南部、瀬峰地区に多く残されていますが、金成地区、高清水地区、瀬峰地区では消失したものも多くあります。

また、伊豆沼や蕪栗沼の面積についてもかつての半分、もしくはそれ以下に減少しており、動物の生息にも影響が出ていると考えられます。



図 2-1 河川、湖沼、ため池及びダム位置図

(3) 気象

栗原市は、一年を通じて寒暖の差が大きく、特に北西部の栗駒山周辺で冬場の降雪が多く、南東部は温暖で雪が少ないという特徴がみられます。また夏場の一時期を除いてその他の時期はほぼ、西または西北西からの風が吹きます。

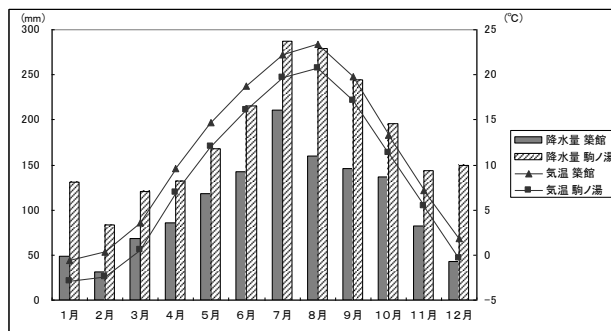


図 2-2 気象概況 (H9~18 の月平均値)
出典：気象庁HP

(4) 緑地環境

平野は現在、水田と畑地などの耕地となっており、伊豆沼・内沼などの一部にはかつての水生湿生の植物群落の面影を見ることができます。スギ、アカマツ、ヒノキなどの植林が多い丘陵地は、古くから開発された地域ですが、栗駒山麓の栗駒地区玉山にはイヌブナ林が残されています。山地では、かつて広大なブナ林に覆われていた部分は、戦後の急激な伐採後、二次的に成立したミズナラ林、ススキ草原、スギやカラマツの植林地や耕作地などになっています。さらに標高があがるにつれ、高さ2m内外の落葉広葉低木と常緑低木が密に混生する地帯からハイマツ低木林へと変化します。栗駒山山腹には世界谷地湿原があり、虚空蔵山の御室の東斜面には雪田植物群落が発達しています。

また、伊豆沼・内沼の沼沢地植物群落や栗駒山の原生林など、12箇所の特定植物群落や多くの巨樹・巨木林が存在します。

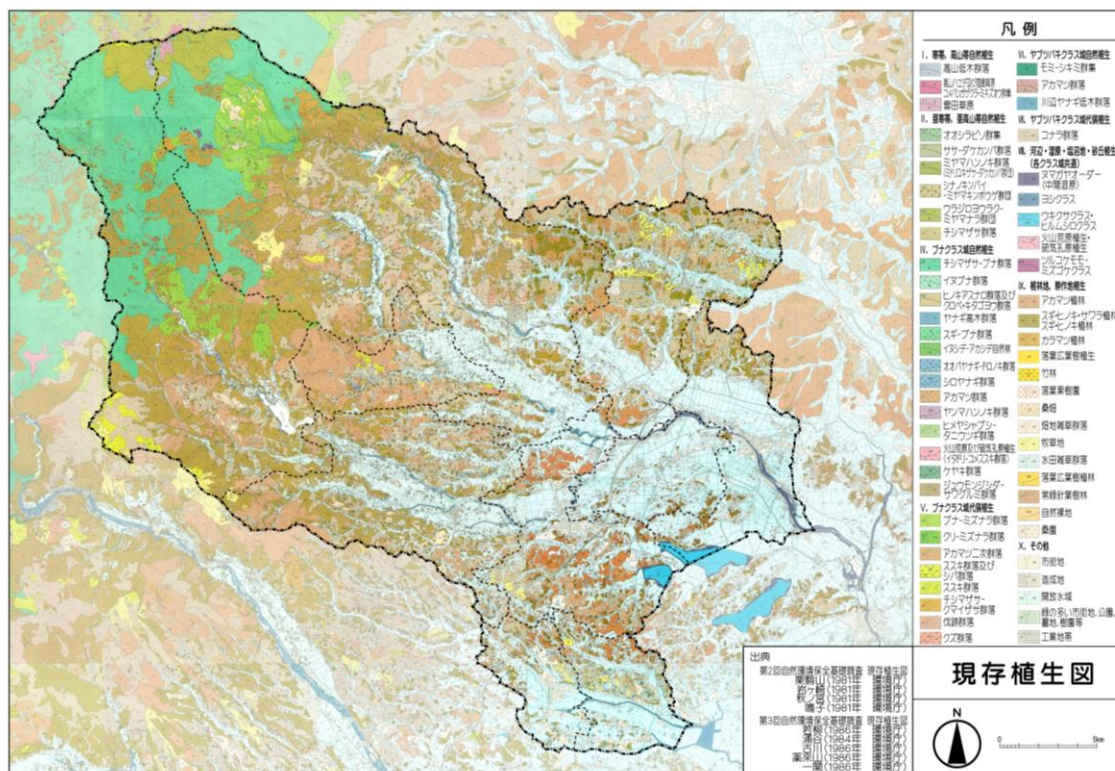


図 2-3 現存植生図

(5) 生物生息環境

山間地はブナやコナラなどの自然林や植林地が多く、標高があがるにつれて山地特有の植物群落をみることができます。そこでは、テンやニホンカモシカの生息が確認されるほか、エナガやヤマドリ、貴重種のオオタカなども観察され、河畔では貴重種のクロサナエやキイロツヤシデムシも観察されます。

丘陵地はコナラの自然林やスギの植林地と河川沿いの水田からなり、多様な生物が観察されます。水田地帯ではキジバトやダイサギなどのほか、貴重種のマガンの生息が確認され、水辺では貴重種のトウキョウダルマガエルやツチガエル、ルリボシヤンマなどのほか、スナヤツメやキバチなどの魚類も観察されます。

平地は水田と市街地からなり、他の地域に比べ多様な植物相は見られませんが、鳥類や魚類は比較的多くの種類を確認することができます。なかでも伊豆沼・内沼ではマガンの飛来が観察されるほか、水辺や周辺の水田では貴重種のトウキョウダルマガエルやオゼイトトンボなども観察されます。

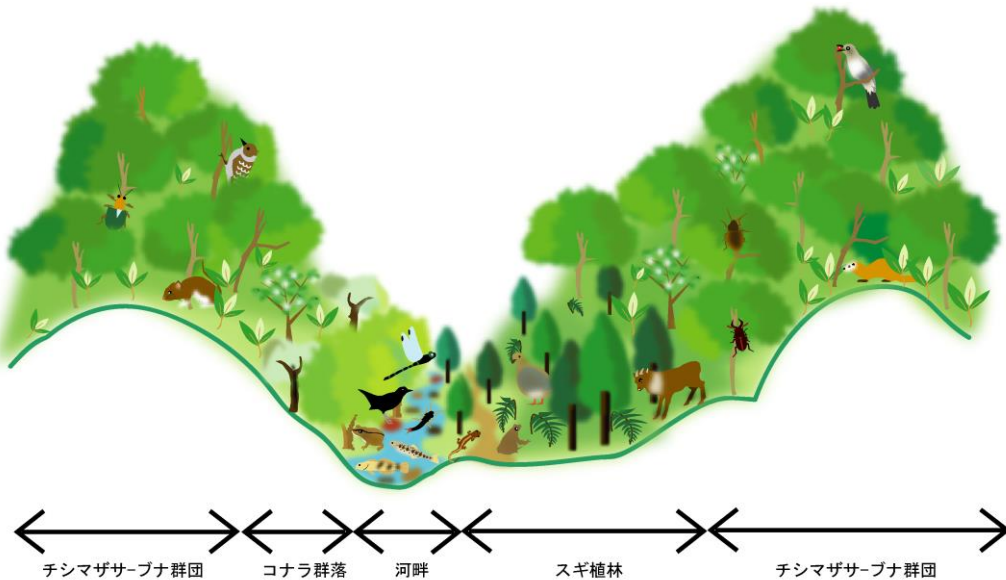


図 2-4 山間地の生物生息環境イメージ



図 2-5 丘陵地の生物生息環境イメージ

2章 環境の現状と課題



図 2-6 平地の生物生息環境イメージ

(6) 土地利用

栗原市は森林が54.8%を占め最も広く、次いで田畑が23.2%を占めています。住宅地は2.6%、工業用地は0.3%となり、市域の多くを森林や農地が占めています。

資料：栗原市国土利用計画(平成19年3月)

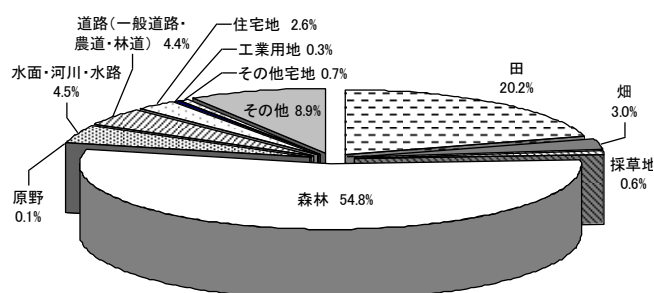


図 2-7 地目別面積構成比

(7) 公園・緑地

栗原市では都市公園24箇所、その他の法に基づき市が設置する公園29箇所が整備されています。

栗駒山周辺地域は栗駒国定公園に指定されており、さらに宮城県の県自然環境保全地域として、御嶽山県自然環境保全地域、一桧山・田代県自然環境保全地域、伊豆沼・内沼県自然環境保全地域が指定されています。

(8) 観光レクリエーション資源

市内西部の丘陵地から山地帯にかけては、栗駒高原のオートキャンプ場や花山ダムの青少年旅行村などの大規模な公園・緑地、世界谷地湿原やアズマシャクナゲの自生北限地などの景勝地など、多くの自然を生かした観光資源が存在しており、細倉マインパークやこもれびの森森林科学館などの学習、体験施設も整備されています。

平地から丘陵地にかけては、山王史跡公園や薬師公園、桂葉清水公園などの歴史資源、栗原の郷土文化を伝えるみちのく風土館や歴史民族資料館などの博物館・資料館、沢辺のゲンジボタル発生地や迫川河川公園、伊豆沼・内沼サンクチュアリセンターやサンクチュアリセンターつきだて館などの水辺のレクリエーション施設も存在します。

また、栗駒山周辺や金成地区には温泉施設が整備されています。

(9) 景観資源

栗原市は、火山性の栗駒山を持ち、これらの山地を端にする迫川、二迫川、三迫川が東に向かって流下し、河岸段丘を形成しています。

文献による調査の結果、栗原市では表2-1に示す景観資源が確認されています。

表 2-1 自然景観資源確認状況

自然資源名	名称	自然資源名	名称
火山群	栗駒火山群（栗駒、花山）	峡谷・溪谷	川原小屋沢（花山）
火山	揚石山（栗駒）		裏沢（栗駒）
	大地森（栗駒）		浅布溪谷（花山）
	虚空蔵山（栗駒）		牛淵溪谷（一迫）
	栗駒山（栗駒）	自由蛇行河川	栗駒姫松・二迫川（栗駒、築館）
	東栗駒山（栗駒）		
非火山性孤峰	中ノ森（栗駒）	滝	湯の倉滝（花山）
	櫃ヶ森（栗駒）		大地滝（栗駒）
	大土森（一迫）		窓滝（栗駒）
	御駒岳（花山）		行者滝（栗駒）
	大土ヶ森（栗駒、鶯沢、花山）		下滝（花山）
湖沼	内沼（築館）	湿原	上滝（花山）
	伊豆沼（若柳）		世界谷地湿原（栗駒）

出典：宮城県自然環境情報図（1989年 環境省）

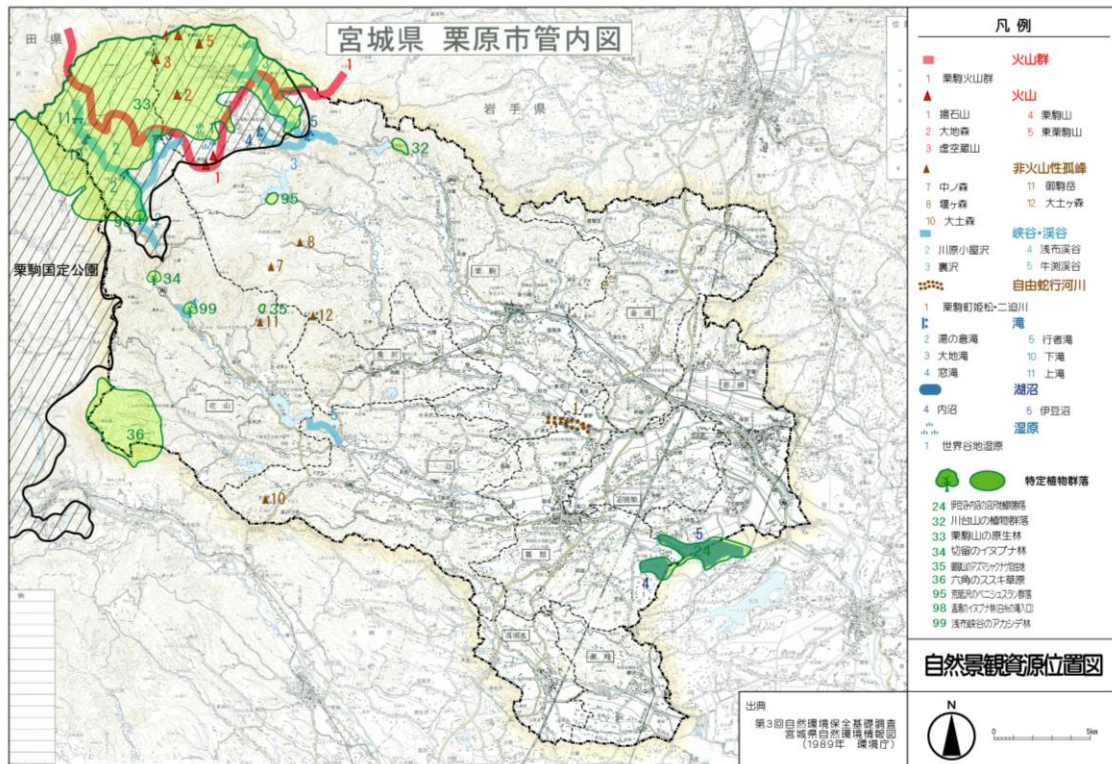


図 2-8 自然景観資源

2. 生活環境

(1) 人口

平成17年の栗原市の人口総数は80,248人で、市全域で人口は年々減少傾向にあります。

表 2-2 人口分布

	H17 (人)	H12 (人)	H12～H17の増減	
			(人)	(%)
栗原市	80,248	84,947	-4,699	-5.5
築館地区	15,271	15,866	-595	-3.8
若柳地区	13,863	14,714	-851	-5.8
栗駒地区	13,135	14,164	-1,029	-7.3
高清水地区	4,192	4,470	-278	-6.2
一迫地区	8,800	9,517	-717	-7.5
瀬峰地区	5,300	5,515	-215	-3.9
鶯沢地区	2,973	3,218	-245	-7.6
金成地区	7,927	8,334	-407	-4.9
志波姫地区	7,317	7,545	-228	-3.0
花山地区	1,470	1,604	-134	-8.4

出典：平成17年国勢調査 人口、人口増減（平成12年～17年）

(2) 産業

平成17年の産業別人口は、第一次産業人口が全体の約17.8%、第二次産業が約29.9%、第三次産業が約52.3%と最も高くなっていますが、宮城県全体に比べ第一次産業、及び第二次産業人口の比率が高くなっています。

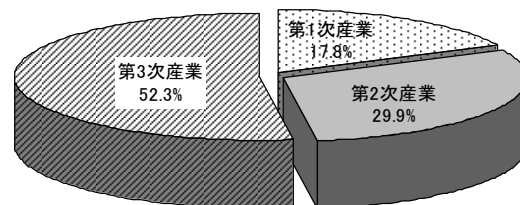


図 2-9 産業(大分類)別15歳以上就業者数

出典：平成17年国勢調査 産業(大分類)

(3) 交通

東部の平野部に仙台から一関・盛岡へとつながる主要ルートとして国道4号、東北自動車道、JR東北本線、東北新幹線が縦断しており、東北自動車道築館IC、若柳金成IC、東北新幹線くりこま高原駅が利用できます。

このほか、国道398号、国道457号をはじめ県道、市道、広域農道などにより地域間の縦横な交通を支えています。

(4) 大気環境

栗原市には、大気観測所が2箇所設置されています。築館測定局では窒素酸化物、光化学オキシダント、浮遊粒子状物質が測定されており、鶯沢測定局では二酸化硫黄、浮遊粒子状物質の測定が行われています。

築館測定所においては、二酸化窒素、窒素酸化物、浮遊粒子状物質の濃度は環境基準を達成していますが、光化学オキシダント濃度は環境基準を超える結果となっています。(宮城県：平成17年度大気汚染の状況)

鶯沢測定局においては、二酸化硫黄、浮遊粒子状物質の濃度は環境基準を達成しています。(宮城県：平成17年度大気汚染の状況)

(5) 水環境

栗原市では、以下に示す河川、湖沼において類型指定がされており、河川については、どの地点でも環境基準を達成するBODの測定結果がでていますが、湖沼については全ての測定地点でCODの値が環境基準を大きく超える測定結果となっています。

表 2-3 水域類型 (河川)

水系・水域	水域の範囲	類型	達成期間	指定年月日	指定機関	BOD		
						地点名	数値 (mg/l)	環境基準
金流川	金流川上流 (岩手県県境から上流 (流入する支川を含む))	A	イ	H4. 4. 1	県	小畑橋 (金成)	1. 4	2mg/1 以下
有馬川	有馬川上流 (岩手県県境から上流 (流入する支川を含む))	A	イ	H11. 5. 7	県	字南田橋 (金成)	1. 1	2mg/1 以下
北上川	迫川上流 (迫川上流 (花山ダム流入口より上流)、二迫川上流 (中山橋より上流)、及び三迫川上流 (栗駒ダム流入口より上流))	AA	イ	S47. 4. 28	県	花山ダム流入部 (花山)	< 0. 5	1mg/1 以下
						鍛冶屋橋 (栗駒)	0. 7	
	迫川中流 (夏川合流点より上流の迫川、二迫川 (流入する支川を含む))	A	イ	S47. 4. 28	県	洞万橋 (栗駒) (栗駒ダム)	< 0. 5	2mg/1 以下
						若柳	0. 9	

注) 達成期間の欄の各記号の意義は次のとおり
「イ」：直ちに達成

出典：平成 18 年度 公共用水域及び地下水水質測定結果報告書 (宮城県)

表 2-4 水域類型 (湖沼)

水域名	水域の範囲	生活環境の保全に関する類型指定				COD		
		類型	達成期間	指定年月日	指定機関	地点名	数値 (mg/l)	環境基準
荒砥沢ダム (栗駒)	-	-	-	-	-	ダム出口	2. 3	-
栗駒ダム (栗駒)	栗駒ダム全域	AA	イ	S47. 4. 28	県	ダムサイト	2. 4	1mg/1 以下
花山ダム (花山)	花山ダム全域	AA	イ	S47. 4. 28	県	ダムサイト	3. 2	1mg/1 以下
伊豆沼 (築館、若柳)	伊豆沼全域 (内沼を含む)	B	イ	S48. 5. 29	県	伊豆沼出口	9. 3	5mg/1 以下
						内沼 (沼出口)	10. 0	
						伊豆沼中央	9. 3	

注) 達成期間の欄の各記号の意義は次のとおり
「イ」：直ちに達成

※ 荒砥沢ダムは類型指定水域に指定されていないが、CODの測定が行われている。

出典：平成 18 年度 公共用水域及び地下水水質測定結果報告書 (宮城県)

2章 環境の現状と課題



図 2-10 水質観測地点

(6) 騒音・振動

騒音・振動については、東北新幹線沿線で3地点の観測、東北自動車道においては1地点の観測が行われています。

東北自動車道については、騒音の環境基準を達成していますが、一般道については一部の区間で環境基準を超えている地区があります。また、新幹線については騒音、振動ともに環境基準を超える結果となっており、防音壁の嵩上げ、レールの削正などの対策が講じられています。

(7) 土壌汚染

かつて二迫川流域においてカドミウムによる土壌汚染が確認され、昭和51年に「農用地の土壌の汚染防止に関する法律」に基づく地域指定が行われ、公害防除特別土地改良事業が行われています。

出典：平成18年度 宮城県環境白書

(8) 悪臭

悪臭による苦情件数をみると、平成18年度における苦情は15件と、前年度の9件より増加しています。

出典：栗原市資料

3. 社会環境

(1) ごみ減量化とリサイクル

栗原市のごみの排出量は、平成18年度では18,498 tで、平成13年度からほぼ減少傾向にあります。また、平成18年度のリサイクル率は、11.8%で平成13年度から4.3%上がっています。

表 2-5 栗原市のごみ排出量の推移

種別/年度別	13年度	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度
可燃ごみ	17,157.24	17,311.57	17,162.38	17,081.31	17,265.96	16,804.59
不燃ごみ	1,769.45	1,748.93	1,545.39	1,197.58	1,111.21	1,059.71
粗大ゴミ	526.69	656.63	759.67	726.39	701.11	633.85
合計	19,453.38	19,717.13	19,467.44	19,005.28	19,078.28	18,498.15

単位:t

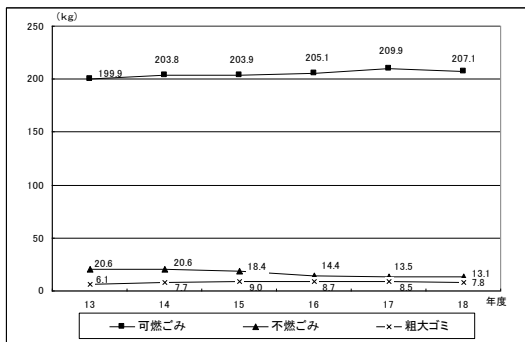


図 2-11 一人当たりのごみ排出量の推移

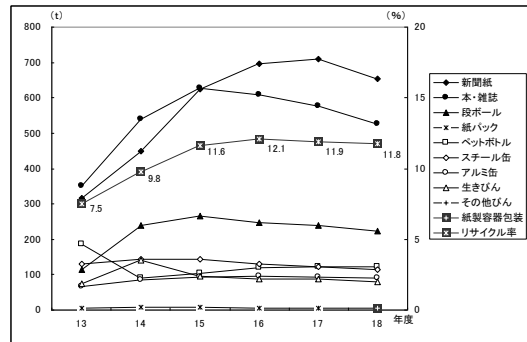


図 2-12 資源ごみ回収量とリサイクル率の推移

出典：栗原市資料

(2) 環境教育、環境イベント

鶯沢地区では、環境学習プログラムを組み、小中学校や高等学校、一般向けに環境学習テキストの作成や学校教育の中での環境教育に取り組んでいます。

また、各地区で種々の団体により、景観美化のためのごみ拾いや清掃活動、河川、堤防の草刈り、花壇の育成管理、ごみ減量化や省エネに関する啓発イベントが行われており、年2回行われる伊豆沼・内沼クリーンキャンペーンには、地元小中学生や企業、各種団体等が参加し、ごみ拾いなどの清掃作業が行われています。



伊豆沼・内沼クリーンキャンペーン



用水路での「きやはず」体験

4. 地球環境

(1) 新エネルギー・省エネルギー

新エネルギーや省エネルギーに対する取り組みについては、平成18年12月に実施した事業者を対象としたアンケート調査によると、省エネ機器の導入を現在実施している事業所は3割を超え、今後導入を希望している事業所と合わせると、6割程度となり、比較的導入しやすいと考えられますが、新エネルギーについては、ほぼ導入されていない結果となっています。

市内の公共施設については、鶯沢小学校において、太陽光発電や太陽熱の利用などの新エネルギーの利用や雨水利用、窓サッシの断熱化による省エネルギーへの取り組みが行われています。また、栗原市立若柳病院では地中熱の利用や雨水の利用に取り組んでいます。



太陽光発電を利用している鶯沢小学校

(2) 酸性雨・酸性雪

酸性雨の調査は県内全域で年1回実施されています。

栗原市においては、合併前の平成16年度までは各旧町村で測定されていましたが、合併した平成17年度以降は市内3地点（築館、金成、花山）で測定されています。

平成18年度調査の結果、県平均は pH4.46で、栗原市3地点の平均は pH4.33となっています。酸性雨は、全県的かつ定期的に観測されていますが、湖沼や土壌への影響は現在のところ認められていません。

また、酸性雪の調査は、平成19年1月から2月にかけて金成地区で測定されており、調査結果は平均で pH5.3となっています。

出典：全県一斉酸性雨調査<平成12年～18年>（宮城県環境生活部 環境対策課）
平成18年度酸性雪調査業務報告書

(3) 温室効果ガス排出量

市民アンケート調査（平成18年11月実施）によると、一人あたりの年間の二酸化炭素排出量は4878.3kg-CO₂/年で、栗原市全人口に換算すると414,396,950 kg-CO₂となります。

表 2-6 一人当たり二酸化炭素排出量

項目	排出量
年間排出量	4878.3kg-CO ₂ /年
夏期排出量（5～10月）	346.0 kg-CO ₂ /月
冬期排出量（11～4月）	467.1 kg-CO ₂ /月

出典：平成18年度 市民アンケート調査

この二酸化炭素排出量を一年間で酸素交換するために必要な樹木（単木<スギ>）の量に例えると、栗原市民一人当たりが一年間に排出した二酸化炭素を酸素交換するためには、約174本が必要となります。

単木（スギ） 直径25cm・樹高20m
二酸化炭素の取込み量20～35kg（中央値28kg）
酸素の排出量15～26kg

出典：木へ取込む二酸化炭素量 財団法人日本木材総合情報センター



5. 環境関連法規制等

(1) 環境関連法規制

① 国定公園・県自然環境保全地域

栗原市では1箇所の国定公園と3箇所の県自然環境保全地域が指定されています。

表 2-7 自然環境保全指定地域

種別	名称	面積（陸域）
国定公園	栗駒国定公園（栗駒、花山）	8,500ha
自然環境保全地域	御嶽山 ^{みたけやま} 県自然環境保全地域（花山）	49.65ha
	一桧山・田代 ^{いっぴつやま たしろ} 県自然環境保全地域（花山）	446.03ha
	伊豆沼・内沼 ^{いづのうま うちのうま} 県自然環境保全地域（築館、若柳） ※ラムサール条約湿地	322.00ha

平成17年12月

出典：宮城県HP自然公園等区域閲覧サービス

② 鳥獣保護区

栗原市では6種35箇所の保護区が設定されています。

表 2-8 鳥獣保護指定区域数

種別	箇所数
鳥獣保護区	13
鳥獣保護区特別保護地区	3
銃猟禁止区域	6
休猟区	4
指定猟法（鉛製散弾）禁止区域	8
国定公園特別保護地区	1

出典：平成18年度 宮城県環境白書

③ ホタル保護区

昭和15年2月10日に沢辺のゲンジボタル発生地として国の天然記念物の指定を受け、平成15年9月30日には、金成ホタル保護条例を施行し金成地区を保護区域とし、合併後も引き続きホタルの保護を図っています。



ホタルの里「おきなざわ」案内マップ



沢辺ゲンジボタル発生地

6. 環境意識

(1) 市民の環境意識

① 身の回りの環境

平成18年11月に行った市民アンケート調査から、身の回りの環境については、「空気が澄んでいる」、「森の環境がよい」と感じている人が全体で6割以上を占めますが、湖沼・河川環境や自然に触れ合う場所の多さについては、花山地区、一迫地区を除き、満足していない人が半数近くいることが分かりました。また「道路などにごみが投げ捨てられている」と感じている人は8割弱を占め、非常に高い結果となりました。

② 環境に配慮した行動

生活する上で心がけていることとしては、ごみの出し方についての意識が非常に高く、リサイクルやリユース、省エネの意識も比較的高いことが分かります。一方、車の利用度が高く、自動車利用の軽減による環境への配慮については意識が低い結果となりました。

地区別では、特に鶯沢地区で「省エネルギー型の家庭電化製品を選択して購入する」、「地域の緑化活動（花壇への植栽等）や美化活動（一斉清掃等）への参加」、「国や県、栗原市が提唱する環境保全活動への協力（クリーンキャンペーン等）」について、心がけている人が多いことが分かりました。

また、志波姫地区では、自然エネルギーの利活用を心がけている人（常に心がけている、だいたい心がけている）が4割と高くなっています。

③ 環境配慮型の営農状況

専業・兼業農家の回答者を対象に、生産者の立場で農業において重要と思われるものについて調査したところ、「おいしい農産物の生産」や「食品栄養価の高さ」、「生産性、労働の効率化」が上位に上げられており、「環境負荷の低減」や「消費者との顔の見える関係（パートナーシップ）」、「自然環境との共生、農村・里山景観の保全」については優先順位の低いことが分かりました。

また、環境配慮型農業への取り組みについては、農薬や化学肥料の低減による栽培や有機質堆肥や厩堆肥による栽培について、特に意識をもたれていることが分かりました。

④ 環境問題

地球規模の環境問題に対する意識については、「地球温暖化」への問題意識が8割と高く、その他「オゾン層の破壊」、「開発途上国の公害問題（水質汚濁、大気汚染等）」、「酸性雨」などに対して強く問題意識をもっていることが分かりました。

また、地域規模の環境問題に対しては「ごみの不法投棄」が最も高く、「河川・湖沼の水質汚濁」についても同様に問題意識が高いことが分かりました。

⑤ 行政に取り組んでほしいこと

行政に取り組んでほしいこととしては、「リサイクル等ごみの減量化の推進」、「廃棄物の適正処理を行うためのリサイクル処理・処分施設の整備」、「河川・湖沼環境の保全」が多い結果となりました。

(2) 小中学生の環境意識

① 身の回りの環境に対する意識

平成18年11月に行った小中学生アンケート調査から、身の回りの環境については、「空気がすんでいる」、「森の自然が豊かである」が全体で6割以上を占め、「道路などにごみが投げ捨てられている」と感じている人が8割弱となり、市民アンケート調査と同様の結果となりました。湖や沼、川や森などの遊び場については、十分でないと感じている人が4割～6割と高いことが分かりました。

② 身近な環境にやさしい行動

生活する上での環境への配慮については、観光地へ行ったときは、なるべく自然を壊さないように心がけている人が8割と高い結果となりました。

また、「外出したときはその場にゴミを捨てないようにする」、「ゴミは地域のルールに従ってきちんと出すようにする」については心がけている人が多いが、日ごろの生活においてできるだけゴミを出さないよう心がけている人は少ないことが分かりました。

③ 環境問題

地球規模の環境問題に対する意識については、地球温暖化やオゾン層の破壊、砂漠化、海洋汚染など、全ての環境問題に対して、高い意識をもっていることが分かりました。

また、地域規模の環境問題に対しては「ごみの不法投棄」や「河川・湖沼の水質汚濁」について特に問題意識が高く、市民アンケート調査と同様の結果となりました。

④ 将来の栗原市の環境の姿

将来の栗原市の望む姿としては、「空気がすんでいるまち」、「水がきれいな（水質が良好）まち」、「栗原産の米、野菜、果物、牛肉などがおいしいまち」が多くあげられています。

(3) 事業者の環境意識

① 環境対策の実施状況

平成19年1月に行った事業者アンケート調査から、環境対策の実施状況については、「こまめな節電、節水などの省エネルギーの推進」が8割以上と高く、「廃棄物削減の努力」、「廃棄物・古紙などのリサイクルの努力」などもよく実施されている結果となりました。反対に、「ISO14001の取得」、「環境報告書の作成・公表」、「環境保全のための技術開発」、「バイオディーゼル燃料の利用」、「環境会計の導入」の実施状況については、1割以下と低いことがわかりました。

② 環境対策設備の導入状況

環境対策設備等の導入状況については、「省エネ機器の導入」が3割と最も高く、他の項目については1割以下と非常に低いことがわかりました。

また「低公害車の導入」については、今後実施したいと考えている事業所を含めると3割となりました。設備導入の難しさや環境に配慮した経営の阻害要因については、費用負担の問題や技術開発の遅れ、理解不足などがあげられています。

(4) 農業事業者の環境への意識

① 環境対策の意識

平成19年1月に行った農業事業者アンケート調査から、農業事業者の環境対策の意識については、7割の事業者が「農業が環境を保全してきた」と考えており、エコファーマーについては8割の事業者が「知っている」と回答しました。

また、適正農薬規範については、5割の事業者が取り組んでいる結果となりました。

② 農業の現状

農業の現状については、「稲わらは、有効活用するため自家消費する」と回答した事業者の割合は8割と高く、粃殻の自家消費については6割以上が実施していることがわかりました。

また、殺虫剤・土壌消毒剤などの農薬を低減した栽培を実施している事業者は7割となることがわかりました。

環境に配慮した農業の取り組みにおける障害については、販売価格がみあわないことや、農産物が高く売れないこと、手間や時間がかかることなどが多くあげられています。

③ 環境対策設備の導入状況

環境対策設備の導入状況については、「省エネ機器の導入」と「太陽熱温水器の導入」が1割で、その他に「ペレットストーブ、チップボイラー等の導入」が1.8%となっています。「低公害車の導入」については今後導入したいと考えている事業者が3割となっており、これらの中では高い割合を示しています。

(5) 行政区における環境の現状

① 動植物の目撃情報

平成19年1月に行った行政区長アンケート調査から、動植物の目撃情報について、「昔目撃したが最近見ていないもの」として、カジカやゲンゴロウ、カワセミ、フクロウなどが多くあげられています。その原因としては、水溜りや池、雑木林など生息地の減少や農薬や生活排水の流入による河川環境の悪化、自然との関わりの希薄化が考えられています。



カジカ



ゲンゴロウ



カワセミ



フクロウ

出典：ベストフィールド図鑑シリーズ vol6 日本の淡水魚 株式会社学習研究社
自然百科シリーズ2 宮城の昆虫 河北新報社
自然百科シリーズ4 宮城の野鳥 河北新報社

② 共同管理

ため池（堤）、雑木林、及び植林のされた共有林の共同管理の実態として、ため池や雑木林については、半数以上が「管理が不十分である」と回答していますが、植林のされた共有林については、半数以上が「十分に管理している」と回答する結果となりました。

③ 環境保全等にかかわる行事

環境保全、環境美化等と関わりが深い行政区の行事については、7割が実施していることが分かりました。行事の内容としては、道路や水路、公園等のごみ拾い、草刈り、花壇の植栽などが多く行われています。

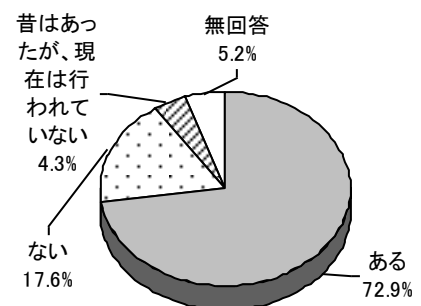


図 2-13 環境保全に関わる行事の実施状況

④ 環境保全にかかわる課題

行政区における環境保全にかかわる課題としては、河川改修など整備後の保全・管理不足への対策、少子高齢化による遊休農地の増加と管理対策、公共下水道の完全普及対策、宅地造成などによる自然破壊への対策、環境問題に取り組むための組織・体制づくりの充実などがあげられています。

7. 環境特性と課題

(1) 全体の特性と課題

① 環境特性

栗原市は、山地、丘陵地、平地と地形の変化に富んでおり、多様な生物の生息が観察されます。特に栗駒山周辺や伊豆沼・内沼などはその自然とのふれあいを目的とし、市内外から多くの人を訪れる場所となっています。

市民の環境に対する意識については、山地部では自然環境に満足していますが、環境に対する意識が比較的低い傾向にあり、丘陵地や平地では、自然環境に対する満足度が低く環境に対する意識が高い傾向にあります。特に、水環境に対する満足度は低く、改善を求める声が多くあがっています。

② 課題

栗原市全体において、河川・湖沼の水質改善や親水空間の整備が強く求められており、市民の協働、地区間の協力体制を含め、これらの対策方針を検討する必要があります。

市民の意識の高いごみ問題については、ごみの不法投棄防止対策や減量化の推進、リサイクル施設の整備の検討が必要です。

さらに、広く市民の環境に対する意識を高めるため、自然体験プログラムの充実や環境に関する情報発信、環境教育の推進、また、自然エネルギーの利活用や事業者に対する環境対策設備の導入を推進するための方策などについての検討が必要となっています。

③ 個別課題

ア. 河川・湖沼の水質汚濁

伊豆沼・内沼やダム湖では、水質調査からCODの値が基準値を大きく上回る測定結果が出ており、そこへ流入する河川の水質と合わせて湖沼の水質改善を進める必要があります。

イ. 親水空間の不足

市内には多くの河川がありますが、市民アンケートによると親水空間は十分とはいえない状況です。特に市街地付近では不足をうったえる声が多くあがっています。

ウ. ごみの不法投棄

道路のごみのポイ捨てや不法投棄については、市内全体で問題とされています。特に、栗駒地区では観光客が多く、ポイ捨てが目立ちます。観光客を含め、地域住民が協力して、ポイ捨てや不法投棄の防止対策に取り組む必要があります。

エ. ごみの分別、減量化

ごみの処理については、全国の自治体で様々な取り組みが行われています。栗原市でも資源回収がすすめられ、リサイクル率は上昇していますが、依然としてごみの分別が徹底されていない状況です。一人ひとりが分別の徹底に努め、減量化に取り組むことが求められています。

2章 環境の現状と課題

オ. 休耕田・遊休農地の増加

農業において、後継者不足や高齢化により休耕田や遊休農地が増加しています。栗原の美しい風景を構成する大きな要素でもある農地を今後も守り続けるため、農業の活性化や後継者の育成に積極的に取り組む必要があります。

カ. 環境意識啓発の不足

現代の環境問題や特に栗原の環境問題に対して、地区によっては意識が低い傾向にあります。伊豆沼・内沼や栗駒山などの栗原の豊富な自然資源を活かしながら、環境に対する関心や意識を高めていく必要があります。

キ. 高齢化による地域の担い手不足

若年層の都市部への流出などにより、地域の担い手が不足しており、地域活動が十分に行われない傾向にあります。住民が地域への関心を深め、助け合いながら生活できる環境づくりが求められています。

